

予備隊 訪問記

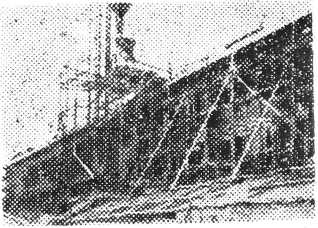
校舎難そのけの大建築

建築費用総額四億五千万円 再軍備の母体になるか



講和條約の締結と共に再軍備の問題が大きくクローズアップされ更に今年度五百億の予算計上、文教費の大幅削減、六二訓論議の出現等いやはが上にも予備隊に対する関心が深まっているこの時我々は予備隊の実体をつかむべく伊丹市の緑ヶ丘にある警察予備隊第三管区總監部を訪ねた。

兵庫県伊丹にある元国警第一警 警察学校をそのまま使っている第一管区總監部は、入口から伊丹の他警機類を持ち、頭は略帽飛行場や池田市を見通せる小高い丘にある。警備所が簡単な手続をすませた後、毎土曜日に全員出場して分列行進が行われる運動場を通り調査部に案内されここで再び調査を受けた後、この部の幹部が面談してくれた。



建築費四億五千万円の大建築 予備隊第四管区總監部(写真部提供)

現在この第三管区總監部は旧国警第一警警察学校の校舎をそのまま使っている不備な点も多いが、棟敷に七八つその中に各事務部、隊員宿舎及食堂、風呂酒保等がある。しかし現在の宿所の近くに今大規模な建築がこの總監部の為に行われている。この現場をたずねてその模様を建設者の係官にたずねると敷地は約二万坪の広さで費用がざつと二億八千万円、別に伊丹にある連隊本部の建設費用を加へると四億五千万円と莫大な金額に達する。鉄筋の建物が二棟、隊員宿舎が六棟(収容人員が二百名であるから一人平均一、二坪になる期近)その他食堂酒保講堂等が十八棟、延作業人員が十四万四千人というまことに大規模の工事である。

この頭を除いて軍隊によく似た姿で講和後は「予備隊が軍隊」として隊員に聞くと毎週十回、総立合の元に分列行進をやるといふ。このような訓練は予備隊は未だ制度を多分に取り入れているからであつて、米人が技術顧問として来ている。旧軍隊とよく似た番兵(でない警備といふこと)だ。このことを聞くと、前者は三週間一度位の外泊で、後者は訓練を挙げた。又伊丹の町の人の予備隊員に対する感情を聞くと一般に冷いそう。

予備隊入隊の動機をたずねると多くの人は自衛を守るという精神が主であるが退職金の六万円が相当の魅力になっている。退職者は全体の約10% (七千人)ほどでその主な理由は経済的な面と自分の期待したより低い地位への不満等によるのであるらしい。

試み、隊員の経済状態を調べると入隊したての二等警査で四千五百円、土補になつて六千円、れに家族手当などがつく。

幹部は二万二、三千円程度、全体の平均は六、七千円程度である。年齢は若い人で十九歳總監は四十五歳で最年長者は、四十七歳で平均年齢は二十四歳といふことだ。

予備隊は母体になる説だ。

予備隊は、将来再軍備するとして旧軍隊と違つて連合軍として米國との關係が密接である為、つまり米國の兵隊、米國の制度をとり入れているので連合作戦としては大きな長所を持つことになるといふ。

予備隊は日本民族をいかに守り、いかに平和を保つかという縁の下の方持の役になればよいと思つている。しかし現在が国防軍でないから国内の治安維持が目的であり、これに対する自信は十分である。しかし予備隊が出勤しないで日本の秩序が保てれば一番よいと思ふ。

大要石のような話を聞いた後、我々は予備隊の夕食(阪急の栄養師が来て直接当るといふ栄養満点)を済ませ伊丹駅へ向つた。駅前のアーチに「隊員の皆様御苦勞さまです」の言葉、白衣の戦傷兵のおちぶれた舞金風景と隊員の帰宅姿とのコントラストが美に対称的であつた。

では論議出来ないが、私の個人の意見としては、講和後の再軍備と予備隊との關係は密接であることを認める。新憲法は理想であるが、現実にはやはり再軍備をしなければならぬ。しかしその時期及方法は慎重にやらねばならぬ。例えば経済の面、捕虜の事、戦傷兵の事等問題が多くなる。

そして再軍備を行つてその國民感情からしても職業軍人は許されない。そこで再軍備はあらゆる階級からの軍人からなる国防軍を作らねばならないと思う。だから予備隊を中心としてあらゆる階級からの軍人を集めて作るべきだと考へる。つまり予備隊は母体になる説だ。

五時の国旗降下を終つて一日の日課を終える。この後我々は第三管区總監大森憲氏に会つて約十分間講和後の予備隊について語つて貰つた。

我々はそろそろつた政策について